
彼と彼女の曖昧ミーマイン

伊舞 莓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼と彼女の曖昧ミーマイン

【Nコード】

N4339F

【作者名】

伊舞 莓

【あらすじ】

彼はとても良くモテる。バレンタインは紙袋を3つ、4つ持参しないと行けないくらい、良くモテる。そんな彼と私の幼馴染みと云う曖昧な日々。

曖昧な1日目（前書き）

完結予定はありません。実はオチしか決まってません。
（作者にとっても）色々と曖昧な、彼と彼女の曖昧な日々。

曖昧な1日目

「ああああ……。持久走とか本気で面倒くさい！」

「今のお前の顔を見続けるよりかは、精神的に大分マシだ」

うつさい！ と机の下から脛を蹴ると「うぐうつ」と押し殺した様な悲鳴が漏れた。ざまあみやがれ。自分の顔が多少良いからって自慢しやがって。こんな顔でもこちとら地道に頑張ってるんだ（ビューラーしようとして瞼を挟んで悶絶で諦めたなんて、そんな事棚上げだ）！

「てか、女子の方が楽だろーが。俺達と比べてみやがれ」

「あんた達は男でしょーが。体力有り余ってるんだから、少しは健康的に使ったらいいでしょ」

「3キロだぞ？ 健康的すぎて某体操のお兄さんも真っ青だっつの。大体2限だつーのに腹減るんだよ。4限は拷問」

「あーそれは分かる。下手したら3限で鳴るもんねえ。ねえねえ、それよりも英語の予習、やった？ 日本語訳がイミフなんだけど」

「あー？ 見せてやっても良いけど、今度マツク奢れよ」

「この守銭奴め。ポテトのMならおごってやろっ」

「アホか。セツトに決まってるんだろ」

生意気な事を云いながら鞆をあさりだした男に、ちっと舌打ちする。

神様って不公平だ。顔も頭も良い人間をこの世に生み出すなんて。その上周りには『優しくて思いやり溢れて、ノリも良い美少年』で通っているから、周りから見ればパーフェクトだ。この前のバレンタインなんて、黄色い声がうるさいの何の（此奴はこの席から動

かずにずっとチョコ食ってた。だから必然的教室は女子の山で私は席に着けなかった）。

こんな人間が幼馴染みの腐れ縁ってどーよ？

私は唯の一般市民で、帰宅部の特殊な事って云ったら此奴がお向かいさんな事ぐらいなのに。

こんなのが幼馴染みだったら、

惚れないわけ、ないじゃないか。

曖昧な1日目（後書き）

曖昧な私と私の物みたいの意味と、ノリとリズムで決めたタイトル。作者にネーミングセンスなんて皆無です。欠片さえ見た事ありません。

このタイトル、何処かで見た事があっても気にしないで下さい。作者が15秒くらいで決めたので。

曖昧な2日目（前書き）

曖昧な日常は曖昧な関係のままで、この距離が近いのかそうじゃないのかすら解らない。

曖昧な2日目

「お前さあ、本当に現代の女子高生か？」

「悪かったね。現代人じゃなくて」

人の金で買ったポテトを摘みながら真顔で尋ねてきた目の前の美形に、軽い殺意が芽生えたのは必然的な流れだと思う。

思いつきり、あのお綺麗な顔をぶん殴ってやりたい。あの無駄に整った鼻をぺしゃんこにしてやりたい。頭の中では既にリングの中でグローブを付けている自分が居た。

私は机の下で拳を固く握って耐えた。物凄く耐えた。流石に女としてどうかと思ったのだ。

その代わりにこちらからお前と違って他人に貢がせる様な顔してねえんだよ。と心の中で吐き捨てる。勿論それだけで収まるはずがないのでオレンジジュースをズコーツと云わせながら啜った。すると、目の前で無駄に綺麗な顔が嘲りの表情を浮かべやがった。

お前の目の前のコーヒートポテトを誰が奢ってやっていると思って居るんだろうか。

おこづかい制の人間としては、外食&オゴリというダブルコンビネーションについては、ひどく御遠慮しておきたいところだというのに。だがしかし、英語の借りがある（あの日は本当に当たってしまった）。なので『仕方なく』奴と一緒にマックまで来てやったのだ。

「いや、俺は女子高生の辺りに重点を置いて言っただけだっただけだな」

「んー…その辺に関しては否定しない。普通の女子高生は彼氏でも

ない男とマツクで1時間も喋らないでしょ。ましてや2人つきりとか、ありえないね」

それもそうだ。と呟いて、残ってたコーヒーを飲み干した無礼者はちゃっちゃと片付けだした。その様を見ながら私はバレないように溜め息を吐いてトレイを持ち上げた。

バイトでもして、お金稼ごうか。そうしたら、また2人つきりになれるだろうか。

高校生にして貢いでるってどーよ。と思いつつもゴミを思いつきりまるめてゴミ箱に入れた。

曖昧な2日目（後書き）

まだ名前が決まっていない曖昧さ。

こんな感じのまま何処まで行けるのかやってみようと思います。

曖昧な3日目（前書き）

結論、貢ぐことにしました。

曖昧な3日目

結局、私はコンビニでバイトを始めた。

笑いたければ笑え。 私は貢ぐ。 ああ高らかに宣言してやろうとも（誰にだなんてツツコミは、ゴミ箱ポイだ！）！

だいぶ板に付いてきたレジ打ちを着々と進める。 飽きっぽい私にしては、2ヶ月もよく持ったもんだ。

店長さんや先輩もいい人で、結構楽しい。 貢ぐ貢がないはおいといて、それなりにお給料も貰っている。 若い女の子が憧れる様なロマンスなんて、欠片もないけれど（店長は40代の普通のオジサンだし、先輩は若い女子大生とオバサマ。 別のバイト君はシフトが違うから会った事がない）、それについて何かを云う程、私は贅沢者じゃないから気にならない。

現実ではロマンスどころじゃなくて、貢いでいるからなんだけだね！

ピークも過ぎてお客さんが居なくなってから、レジから離れて商品の補充に行った。

一応A型だから、気になってしまふ。 特に、立ち読みされた後の雑誌が。

立ち読みは別に良い。 でも、もう少し綺麗にして行けよなあ。 などとグチグチ考えながら直していると、この時間帯にしては珍しく自動ドアの開く音がして、条件反射で『いらっしやいませ』と挨拶する。 何気なくドアの方を見て、その次の瞬間バツと顔を背け、即座にお菓子コーナー（死角）に逃げた。

いやいやいやいやいや、ないないないないない。

だってあれだ。アイツは今日グラマーなセレブ大学生とデート中のハズだ（顔とカラダと金回りは良いんだけどなあ。性格がなあ……。ウザイ。とかぼやいてたのはつい先週だ）。

「驚いた。本当に店員やってるんだな。お前」

「お客様あ、何かご用がおりでしたらあ、あたしい、アルバイトなんでえ、カウンターの方へ お願いしますう」

うう、自分でやつといてなんだけど、気色悪い。私はなるたけ高い声を出してクラスのギャルっぽい女の子の口調を思い出していた。『超無理なんですけど！マジキモイー！』が口癖のクラス1のギャルだ。そんな私の必死の隠蔽工作をアイツはハツと鼻で笑うと後頭部にいきなりデコピンをかましてきた。

「語尾伸ばすなよキモチワリイ。つーか、アルバイトだろうが何だろうが職務放棄かよ。そんなんで給料貰って良いのか。俺に寄越せ」

「うるさいな（云われんでもアンタ用だ！）。こちとら必死でお仕事中なんだから邪魔しないでよ！」

「どこが必死なんだよ。売り上げに貢献しにきてやってんだろぅが。喚くな」

この憎いあんちくしょうは、ニヤニヤ笑いながら私の店員服を眺めている。畜生、背高いから見下ろされてるだけじゃなくて『見下されてる』様な気がして腹立つんだよなあ！

「つーかレイカさん、どーしたのさ」

「あー、めんどいから別れた」

「……それで泣かれてウザかったから、取り敢えず自然消滅狙ってるって、確かアンタ一週間前に云ってたよね。あら？私の記憶違い？それとも幻聴？」

「いや、今回も泣いた。だから振り切って逃げてきた」

「……（女の敵だなコイツは！）呆れた。……で、何を求めでしょうか、お客様？」

「腹減ったから、なんか食いに行こーぜ。昼まだだろ。奢ってやるよ」

一瞬の空白。脳みそが上手くその言葉を租借できなくて、多分3秒ぐらい、思考が停止した。

今までコイツは私に奢ってやるといったことなんかあったろーか。いやない。一回もない。え、なにこれ、何のフラグが立ったんだコレ。人生のロスタイムとかか。

「……………は？どしたの、急に。え、熱でもあるの？」
「失礼なヤツだな。その制服の似あわなさ加減に免じて、奢ってやろうと思ったただだよ」

確かにオレンジのエプロンは、明るすぎて私には似合わない（分かっけても人に云われると腹が立つのは、何故なんだろう！）。

もし、私が此处で断ったら、コイツはどうせ、テコでも動かず営業妨害をするだろう。そういう男だ（人の不幸を楽しみやがって！）。

ながーくふかーい溜息を吐いて決断する。しょうがない（そう、しょうがないのだ）。先輩に云って融通して貰おう。どうせもう残り30分だし、ピークは過ぎて居るんだし、店長も奥にいるはずだし（確か事務作業中）いいんじゃないかな。いいだろう。良

いとは思つのに、どうしてこんなにも云い訳がましく思えるのだろうか。

宣言しておくけど、これは事実であつて云い訳ではないんだよ！ などと思いながらスタッフルームへ。 けつして急ぎ足になんかなつたりしないように、ゆつくりと歩を進める。

「ちよつと、写メるなそこ！ 珍獣じゃないんだから。 自分でも似合わないの分かつてんだよこのやろう」

「ってえな、殴んなよ。 もう取つたし。 待つとくからさつさと行つてこい」

「死ね女の敵！ 今までの分さんざん奢らせてやるから、覚悟しとけチャラ男っ」

へいへいと手を振るヤツを横目に、カウンターの先輩に事情を説明して抜けさせて貰う。

「なに、彼氏なの？ カッコイー。 あんたも若いわねー」

「違いますよ、」

苦笑いをするしかない。 私はどうせ、アイツの彼女には、なれないのだから。

「唯の、幼馴染みの腐れ縁です」

願わくば、いつかこの立場を変えられるような勇気が、身に付きます様に。

曖昧な4日目（前書き）

初めて、貢がれてみました。

曖昧な4日目

「なんでマツクなの。せめてモスでしょ」
「うるさい。文句云うな」

ベシツと頭を叩かれて思わずよろける。「ちよ、私のアイスティーが！ 暴力反対！」と眉を顰めて抗議すると、アイツはお綺麗な顔を歪ませ余裕綽々で片眉を持ち上げ云った。

「ハ、元が元なのにそんな顔してると、更にブツサイクだな」

ほっほおーう？

ちよっとした（此処重要） 不可抗力があつて、席に座る前にヤツの足を軽く（此処重要、テストに出ます） 踏んでしまった。

「つつつつてええ……！ お前、自分の、体重、わかってんの、か？！」

「あゝら、ごつめんあそばせ」ちよっと足がすべちゃって。 いや「やっぱり床が綺麗だと駄目ね」

「お、まえは！ だからって脛を蹴るな！ 痛い！」

「ちよっとした不可抗力が」

「何処がだつ。明らかに作爲的かつ確信犯的だろうが！」

恨みがましい目つきで睨んでくるイケメンに、店内の視線は集まりに集まっている。 オイオイ、なんで溜息吐いただけで盛り上がるんですかオネイサマガタ？ コイツはそんなキャラじゃないですよー。 ちよっと絞ったら即捨てるようなクズ男ですよー。 と心

の中でツツコミの嵐だ（そんな奴に惚れている1人のくせにに。
だなんてツツコミは、現在担当者が不在の為お答えできませんとい
う事にしておこう）。

思えばコイツに惚れて（いるのを自覚して）『彼女』という
ポジションに惚れ続け、早5年。色んな女に（両手両足の数だけ
では足りない程の女達に）嫉妬し続けて早5年。

ある時は同級生に。ある時は後輩に。中学の頃には社会人に。
一番最近で云えばレイカさんに（見た事無いけど）。その前
は後輩である中学生に。とヴァリエーションには事欠かない。

だけど、コイツは『マイルール』とやらを設けているらしく『付
き合うのは3ヶ月以内』だけらしい。本命できたら、どう、するん
だろうか（チクリ、と胸が痛んだ。こんな事、考えなければいい
んだ。消去！）。。

コイツは付き合っている彼女の事を、かなり赤裸々に（かつ淡々
と）語ってきやがるので、私はシタことなんかないのに、かなり
の耳年増になってしまった（そのせいでみんなから誤解されるんだ
よ！ソウイウ話題フツて来んな馬鹿！）。性格が悪いとか、
センスが悪いとかだけなら良い。それ以外にも大分語るのだ。
この男は！（ああもう思い出ただけでも恥ずかしい！）

私がそれでどれだけ傷付いているかなんて、コイツは全く知らな
いだろう。

傷口からは血が溢れて、カサブタもできないくらいに、挟られて
いるのに。

ああ、それらよりも不可解なのは、どうして私がコイツの暗部を
知っているというのに、こんなにベタ惚れなのかということだ！

「人間って、不可解なイキモノだよなあ」

「はあ？ いきなりなんだよ」

「唯単にちよつと人生についての考察をしていただけですが何かー？」

「ふうん。 お前がそんな事を考えられるだなんて、驚きだな。

精々体重の事とか、あの似合わないコンビニの制服ぐらいなものか
と思つてただけだな」

「画像見せるな。 つーか消せコノヤロウ。 イヤイヤ、私だつて
気にしてるよ。 例えばお菓子の量減らしたりとかさ！」

「もう手遅れだろ」

「ちよつと待てまだ平均維持してるから大丈夫だからってなんでそ
こで目え反らす訳こつち向けコルアだからって哀れみの視線向けな
いでくれません腹立つんだよこのタラシが！」

「良く一息で云いきつたなあ。 女の肺活量とは思えな、うわっ」

この憎いアンチクショウは私の不可抗力の一撃をサツとかわしや
がった。 腹が立つのでアイステイーを一気にズズズズツと齧る。

「人生を哲学してた女にしては、気品も何も感じない行動だな。
意地汚い」

「うるさい。 気品のない哲学者もいるかも知れないでしょうが」

「かもな。 ま、個人の自由だけど」

「ちよつと待てなんで私にはその個人の自由が適応されないのよ。
私は立派な日本人ですっ！」

「はいはい、分かった分かった」

腹の立つ返答を返しながら、ヤツはテリヤキバーガーを食してい
る。私もチーズバーガーにかぶりつく。 ああ、体重が増えるー。
でもやめない。 だっておいしいと幸せだから！

もしかもしやと無言でハンバーガーを食しながら、コイツが彼氏だったら、どうなんだろう。とアリエナイ妄想を試してみた。

多分、きつと。私は逃げるんだろうなあ。似合わないから、釣り合わないから、つて。でもそれでも離れられなくて、泣くんだろう、な（ヤバイ、なんかリアルすぎる）。

挟まれた場所が、ジクジクジクジク。膿んで、ボロボロになつて、ドクドクドクドク血を流し続けて。でもそれを隠して。絶対にバレないように、包帯を巻くんだろうな。

グルグルグルグル。何重も。血なんか見えないように。グルグルグルグル。

「てかさー、もうちょつと乙女を氣遣つて、カロリー抑えめなトコに連れてつてくれてもイイじゃん？ マックじゃムードもへったくれもないし」

「なんで俺にそんなモノを求めるんだよ。面倒臭い。大体お前にはマックがお似合いだよ。つーかマックしか考えられない。

It is cheap!」

「ひどい！そこは悪かったとか云って流してよ！てかなんでそんなに発音よく区切るの指さすな！」

「ハハハ、悪い、俺って正直者だから、本当の事しか云え無くつてさ」

「オイオイオイこのエセプレイボーイが何を云うか！爽やかに笑つても無理だよ本性だだ漏れたよ。第一、ついこの間までレイカさんに愛を囁きつつ、裏でウザイウザイほざいてたクセにさ！」

「女には別」

「うわっ最低だこの男。つーか私も女だよ乙女だよ」

「冗談は休み休み云え。乙女はローキックとかしないんだよ。

それにな、考えてもみろ。『好きだ』と云ったら相手は喜ぶし、

俺にも金が入る。一方素直に本心を出して、『お前なんて唯の力ネヅルとしか見ていない』なんて云ってみろ。向こうも悲しむ上に、俺には金が入ってこない。此程意味のない事もそうそう無いだろ？　これはな、ギブ　アンド　テイクなんだよ」

ズキズキズキズキ、ジクジクジクジク。

痛い痛い、傷口が痛みを訴える。骨にまで達して、貫通してしまっただんじやないかって云うぐらい、痛んで。

『お前なんて唯の力ネヅルとしか見ていない』

私も、なのかな。私も、唯の力ネヅルなのかな。彼女なんてポジションには、絶対たどり着けないのかな？　（ああ、そんな事、もつと昔から知っていたのに）

傍にも、居られないのかな？　（あの時にちゃんと、知ったはず、なのに）

ああ、私は欲張りだから、なあ（諦めなきゃ、いけない、のに）。痛い痛い傷口が痛い。ああ、包帯を巻いて、隠さなきゃ。

だって、知られたらきつと、そこで終わりだから。涙なんか見せちゃダメだ。ささやかな幸せだって、得られなくなるんだ。もう二度と、一緒に居られなくなつて、しまふんだ。

「本当に、最低な、男だ、な」

隠して逃げなきゃ。希望はないんだから。

「まあ、カネヅルだけが目的じゃないけど」と、彼が云った言葉の意味なんて、私は知らない。

曖昧な5日目（前書き）

長いのでぶつた切ってみました。

曖昧な5日目

で、何がどうしてこうなったんだっけ？

今、私を覆っている大きくて熱いのって、ナニ？

「なんであんだと帰るのが恒例になってるんざましょ……」

「帰り道が同じ方向で、同じクラスだから被ってるだけだろ」

「偶然の一致かぁ。 あっちゃんに云ったらどうなるかな」

「『偶然！ ああそれは何と神秘的で美しく、且つ素晴らしき事でしょう！ さあ私と一緒に心霊と精神と愛と幻の世界を目指してお祈りを致しましょう！！ はーれるーやーあ』」

「わぁーさっすがーあ。 よっく解ってるーう」

小中高と幼馴染みの、所謂『不思議っ子』の友達の事を持ち出してみる。 長い茶髪を振り乱して、良く分からない愛の神様に忠誠を捧げる彼女はこの辺りの名物だ。 遠目から見ている分にはとても面白いが、絡まれると厄介な人だ。

過去の諸々を思い出して思わず遠い目になってしまった私に、あいつも溜息を吐きながら応じる。

「伊達に2年も同じ委員会にいなえよ。 面白いから良いけどさ、毎回俺に責任が降りかかってくるのは頂けないな」

少しずつ暖かくなっているけれど、まだ5時だというのに太陽は寒い地上からさっさと逃げてしまっている。 私にはもう特に行事はない（帰宅部だから引退なんてないし卒業式に特に感慨が在る訳ではない）。 後は春を、新学期を待つばかり。 と云った時期のハズだ。

何もない。特に、別に何か特別な事があった日ではないはず、だ。

「うー寒い。もう3月なのになあ。マフラーと手袋が手放せない……」

「沖縄はもう温かかったりして、な」

「羨ましいなあ。良いねえ、ビバ・南国」

「夏には北海道の事、ビバ・北国。るーるるるる。って云ってなかったか？」

何も言い返せない（実際その通りだ）。良いじゃないか。思った事なんだから。思いっきり顔を逸らして黙々と歩く。駅前には沢山の人人人。有名私立小学校の制服を着たちみっちゃんこ達がいつぱしにカレカノっぽく手を繋いでいる。時代が進んだと感心するべきなのか、ませすぎだと嘆くべきなのか。

「今時は小学生も凄いなあ。見なよあれ。キヤー可愛いじゃんかあの男の子」

「……おまわりさん、犯罪の匂いが隣から立ち込めてるんですー誘拐未遂ですー」

「誰がするか！」

この腹の立つイケメンの頭を叩きながら、駅の構内に入った。ふと、何の気なしに。そう、特に何もなかった。意識なんかしてなかった。頭が、視線が、券売機とは違う方向に向いた。

其処にいたのは、綺麗な人だった。ライトブラウンの髪の毛はくるくるとウェーブを描いて、今流行の髪型。こぼれ落ちそうなくらい大きな瞳とぷっくりと柔らかそうな唇。その頭には赤いチ

エック柄のベレー帽。そのベレー帽と同じ柄のコートに、白のタートルネックとジーパン。ロングブーツもベージュで、ファッション雑誌から抜け出してきたモデルさんみたいな人だった。流行の綺麗なメイクを完璧にしているその人は、何故かこっちを目を大きく見開いて凝視していた。そして、みるみるうちに長い睫に覆われた瞳に涙が溜まって。そしてキツと（何故か）此方を睨み付けてきた。かと思うと、ずんずんと此方に近づいてきた。

「おい、どうした？」

「え、いやなんか、あの女の人
「ちよつと、いいかしら？」

私が足を止めてる事を不審に思ったアイツが訝しげに声をかけてきた。私はそれに返答しようと振り返った時、後ろから、泣きそうな、そして強い怒りの籠もった声が、した。ん？と云う顔で彼女の方を見たアイツが「あ」と声を上げて、眉根を寄せて（あの女の人には負けるけど）困った様に、その人の名を呼んだ。

「レイカ……」

「少し、話があるの。貴方達2人に、ね」

曖昧な5日目（後書き）

続きます。

曖昧な5日目 2（前書き）

名前がないと予想以上にキツイです。ヒロインだけでも作ろうかな。

曖昧な5日目 2

眉根を寄せた綺麗なお姉様と、幼馴染みのイケメンに挟まれて、私は今、スタバにいます。

話に聴くレイカさんを実際に見るのは初めてだったので思わずしげしげと観察してしまう。長い睫に薔薇色の頬。モデルばりの美しさでさつきから店内の男性の視線はレイカさんに釘付けだ。

全く、本当に毎回毎回思うけど、どうやってこんな綺麗な人をゲットしたんだこのタラシは。と呆れながらもアイステイーを啜る。

店内の視線は店員さん含め、このテーブル一直線だ。だってこの図は明らかに、こう、修羅場的だし。私が第3者だったらやつぱり見ちゃうし。でもできれば見ないでほしい。

私の右側にいる馬鹿は、無言でコーヒーを飲んでいる。レイカさんは運ばれてきたレモンティーに手も付けずに元彼氏を睨み付けている。2人の間には嵐が渦巻いていて、何故か私は、その真ん中にいる。

「2人は、付き合っているのかしら？」

「え？いいえ」「そうだよ。今日はなんでわざわざ呼び止めたりしたんだよ」

「……な……！だって、だって私、私は貴方がっ」

「そんな事云われても、俺はもう別にレイカを見てる訳じゃないから」

ちょっと待て。私の返答まるで無視？ しかもコイツ速攻で嘘付いたよ。付き合っていないよ！コイツ今フリーです！フリーなんですよと周りのギャラリーに云いたい。寧ろ叫びたい。明らか

かに「あの美人からあのイケメンを奪ったのがアレ?!」的な顔だよ！無理だよ！と心中では大絶叫だ。

お願いだからもうほんとこっち見ないでクダサイ！

しかし無情にも私の願いは届かずだんだんと周りのテーブルの囁き声が大きくなり私の耳にもちらほらと飛び込んでくる。

「略奪愛か」「うそー！明らかあつちのがブスじゃん」本当そうだよ。アリエナイ！てかコラ、そこで今ブスとか云った奴表出るや表エ！と内心で怒ったり冷や汗を流しまくったりしていると、全ての元凶が口を開いた。

「大体、俺の愛を信じれないって云ったのは、そっちだろ」

「そ、んな・・・」

ぐつとレイカさんが唇を噛み締めた。うーん、修羅場って初めて見たけど、本当に居たたまれないな。と一応彼女役だということに緊張感無く思ってしまう。

ふと、どうして私はこんなに冷静でいられるのだろうかとぼんやりと考える。

いつもの私なら此处であの馬鹿の頭を思いっきり叩いて「謝りやがれこのやろう！女の子はなあ、総じてみんなデリケートなんだよ！！そりゃあもうプリン並に傷付いちゃうんだよ！プッチンに失敗するよりも惨たらしい事すんな！」とか云ってしまいそうなのに（なんでプリンなのかというと、ブスとか云いやがったテーブルにあつたからだ）。

なんでだろう、とってから、ハッと気が付いた。

今にも泣き出しそうなレイカを見て、多分私は今「ざまあみろ」で、思ってる。

それはあまりにも衝撃的で、あまりにも納得出来た。

なんて、汚いんだろう。なんて薄汚い、浅ましい感情。
今彼が『彼女』と私に云っているのはこの場を切り抜けるための
仮初めでの物で、決して私の物になったりしない、の、に。

懂れて懂れて、焦がれて焦がれて、欲しくって欲しくって、でも、
決して私の所には来たりしない。

貴方の所へは来たんでしょう？それが例え遊びだったとしても。
数ヶ月でも、彼を自分のモノにしたんでしょう？それが例え力
ネズルだったとしても。

汚くって、浅ましくって、本当に嫌になった。グルグルと渦巻
くのは、激しい嫌悪。最低な自分への、とつても醜くて汚い感情。
目の前ではレイカさんが何か云っていて、アイツが淡々と答えて
て。何て云っているのなんてもう、頭に、耳に、心に、入って
こない。

「ねえ、もう、もう、無理、なの……？ 私、私つ、貴方を忘れら
れないの……」

「何度も云うけど 「お前はいい加減黙れこのタラシ」

今自分が何て云ってるのか、もう解らない。唯、此処から今す
ぐ逃げ出したかった。

「あんたは、人を利用すんな。私はあんたと同じクラスで、変え
る方向が一緒の唯の幼馴染みであってそれ以上でもそれ以下でもな
い！ 逃げる為だけに勝手に彼女にすんな馬鹿っ。後、何度も云
うけど女の子は繊細で傷付きやすいんだからもうちよつと言葉を選
べ！ 代金は全ての元凶であるあんたが払え。以上！」

「うわ、相変わらずのマシガントーいつてえ！ だ、か、ら、蹴
んなって云ってんだらうがっ」

「脚が滑った。 帰る！」

店内の視線を十二分に浴びて普通に出て行った（店員さんも良く聞いていたらしく、お金を払わず帰る私に何も云わなかった）。

あの2人が又くつついたらどうしようとか、アイツ弁解するの大変だろうとか、これからどうしようとか、思う事は一杯で、頭の中ゴチャゴチャしてて、なんだか、なんだか急に、

「やばい。 泣きたい」

雑踏の中で、心の中の醜さに引きずられた様に顔が歪んだ私に、誰が気付くというのだろう。

曖昧な5日目 2（後書き）

そして続く。

曖昧な5日目 3 (前書き)

5日目終了です。

曖昧な5日目 3

泣くんなら、やっぱりこう、古典的に、行きたいとは思いませんか。

「う、みー……」

自分の家とは反対方向の列車に乗って。 2時間。 辺りはすっかり真っ暗だ。

いやね、やっぱり海のバカヤローって叫んでみたいと思っ
ても流石に時間も時間なので自粛。

暗い暗い色をした波が、まるで布のみたいに、ゆらゆら揺れている。 まだまだ寒いなと手をさすりながら、テトラポッドの上から空を見上げた。

「おかーさん、驚いてたなあ。 まあ、良いか」

電源を切った携帯を見て苦笑する。 比較的にイイコちゃんだし、家族とはよっぽどの事でもない限り喧嘩もしない。 「コレって『非行』だよな」と小さく口にする。 さっきから独り言が多いのは誰もいないからだ。 誰かいたらこんな恥ずかしい事しやしない。 悶絶ものだ。

波の揺れる音、重たくのし掛かる雲、通り過ぎる風も、何だか世界の全てが冷たくて、鼻先がつんとした。 気付いたら、ポロポロと、目から海が出てきた。

「あ、ほらし……。 なに、やってんだ、か……………」

流れる海はテトラポッドと赤いマフラーに染みを作る。

私にどうしろって云うのかな。あの状況で彼女の振りしておけ
って？ 笑っておけって？ そんな事、できないよ。 苦しいよ。
あんなキタナイ事思っただのに、にっこり笑って君の隣に居れる程、
私図太くないよ。 苦しい、苦しいよ。

どうしてあんなこと思ったんだろ。レイカさん傷ついてたのに。
同じように諦められなくて苦しんでたのに。

どうして。

ああもう。 苦しくて苦しくて身動きできやしない。

海こいに溺れて、もう、息も出来やしない。

「す、きだ……よ。 ばー、か」

叫ぶ事はもう出来ないけど、呟く事なら、許されて欲しい。 そ
う思う事も、いけないのだろうか。

レイカさんの傷付いた顔が、ぐるぐると回って、それに対して自
分がどう思っているのかも解らないぐらい頭の中がゴチャゴチャし
てる。 でも、それでも良かった。 訳が解らないままでも良かった。

だって解ってる。

流れる海なみたの意味なんか知ってしまったら、まだ諦められない自分
に幻滅するって、解ってる。

だから知らない。 解らない。 もう、これは本能なんだ。

泣きたいから泣くし、苦しいから叫ぶ。 愛してくれようがないか
ら、だから愛する。

これはきつと、本能だから。 だから泣いてるんだ。

「ひ……く、う……も、なん、だ、ろ……これ……ひつ。は、は……
キャラ、と、ひうつ違つ……」

しゃくり上げる自分があんまりにも、女の子っぽくって笑いが漏れた。

「お前は泣いてんのか笑ってんのか、どっちなんだよ」
「うえ、つく……は、あ？ ……うわ、なん、でっ」

いきなり話しかけられて、びつくりして振り向いた。そしてすぐに下を向いた。

な、なんで、居るかな？ 誰にも居場所なんか云ってないのに？！

「『神のお告げが、愛の壊れる音が聞こえます！ これはいけません。さあ貴方は何をぼさとして居るんです？ 早く助けに行きなさいっ』 って電話があつてさ。お前アイツが見てるの気付かなかったのか？」

「ぜ、んぜん、気付か、なか、た」

「切符買つとこ見てたつて云うから相当近くにいたと思うぞ。まあだから此処が解つただけど、な」

すっと、私の隣にあつたテトラポッドに腰を下ろした奴は私の事をじつと見ている。私はその視線に耐えられなくて膝の間に顔を埋めた。

レイカさんはどうしたのとか、場所が解つたからって別に来なくて良いじゃないかとか、また頭の中がゴチャゴチャしてて、暫く、出来る限り声を殺して泣いていた。

大分落ち着いてから、隣をちらつと見てみた。

遠くの海を見詰める横顔はやっぱ綺麗で、ああ好きだな。と

また海に溺れていく感覚を自覚する。

それでも良い、と思ったのは何時？

もう、耐えられないと思ったのは、ついさっき。

それでもまだまだ沈んでいく自分に、やっぱり幻滅してるのは、今。

頭を膝に間に再度埋めてから、聞いてみた。 数時間ぶりに喋る声は引きつっていて、喉がひりひりした。

「レイカさん、は」

「ん？ ああ、帰らせた。復縁もしてない」

「さ、むい？」

「そらな。 お前も寒いだろ」

「へ、いき。 早、く帰った、ら？」

「お前は帰るのか？」

なんだか、非道く優しい云い方だなとぼうと思った。 辛い時に優しくこんな甘い空気醸し出されるなーんて、流石すぎでしょ。

こんなだから女の子は引かかるとか。 そんな事を思いながら小刻みに首を振った。 帰るんならお1人で。 大体こんな顔で駅をうるついたり出来ない。

まあすぐに帰るだろうと思っていると、頭に何かが乗った感触がした。 それはゆっくりと私の頭の上を動く。 まるで慰めている、みたいに。

「お前と一緒に帰るって、おばさんに云った手前、1人で帰れる訳ないだろうが」

それから、ゆっくりと、私に覆い被さる、大きな、熱いモノ。

「此处で、お前を待つよ。 帰りたくなるまで、傍にいる」

「な、んで……」

「お前が好きだ。それ以外に、理由なんてない」

それは非道く甘く、鼓膜を震わせた。

頭が真っ白になった。

記憶が飛んだ。

思わず馬鹿みたいに口が開きっぱなしになった。

そして私の思考は冒頭へ帰る。

で、何がどうしてこうなったんだっけ？

今、私を覆っている大きくて熱いモノって、ナニ？

曖昧な5日目 3（後書き）

あまり意識していなかったのですが全部で7日になりそうです。

曖昧な6日目（前書き）

6日目が無駄に長くなったので幾つかに分けます。のでもだもうちよつと続きます。

曖昧な6日目

人生初の朝帰り。翌日はしっかりと熱を出した。

当たり前と云えば当たり前。何時間も海岸に居て、海風に当たり続けたのだから。

唯納得出来ない事に、奴は全く以て元気だった。確かに2時間ぐらい長く彼処にいたけど、それだけなのか。私がひ弱になっただけなのか。

思わず溜息が漏れる。泣き腫らした顔で帰ってきた私を見たお母さんは、黙って私を部屋に上がらせてくれた。非道い顔だし熱も出てるし。と云う訳で、今日は学校をお休みする事にした。

今日は金曜日だから明日と明後日ゆっくり休める。

「暇、だー……」

午前中はずっと寝てた。お昼には薬も飲んだし、宿題もこつそりやって終わらせた。読みかけだった本も読破した。

正直、もうやる事何て、ない。皆無だ。

午前中に寝過ぎてもうそんなに眠くない。夕方5時。昨日と、同じ時間。

ぼんやりとした思考のまま私の頭の中はプカプカと空想の波間を漂っている。

レイカさんは、どうしてるんだろう。アイツと今まで付き合ってきた女の人達は、今、何をして、何を考えているんだろうか。

取り留めもなく色んな事を考えて、そして、結局思い出すのは昨日の海での事。

「好きだ」　と云われて、私はずっと混乱していて、何も云えなかった。

そんな私を、あいつは何時間も黙って抱きしめていてくれた。暖かった。

波の揺れる音、重たくのし掛かる雲、通り過ぎる風。冷たい世界の全てを、彼が私の代わりに受けていた。

「日付が変わった」と彼が小さく呟いた。それからまた少し経ってからまた彼が口を開いた。

「いつも、最後には、お前の所に戻ってた」

「……………？」

「昔から、誰と付き合っても、誰と寝ても、誰の隣にいても、お前が頭の中に居た」

「……………」

ゆつくりと、噛み締める様に呟かれる言葉。　私はそれを他人事の様に聞いていた。

私の頭の中は海月みたいにプカプカと波に攫われ浮き沈みを繰り返して。

これってホントに現実なのかな。　ああ、遂に夢と現実の境目さえも分からなくなったのか、と思ったけど、違った。

今までこう云う展開なんてありえないって思ってたすぐ打ち消したから、どう云うリアクションをとればいいのか解らなかった。

「それが、なんかすっぱえ悔しかった。　特に、最初。　何にも意識しないで、唯云われたから取り敢えず付き合ってみようって思ってた、付き合ってた時。　なんか良く分かんないけど、お前が頭の中から消えなかった時。　なんか、うーん……お前に、負けた気がし

た、っていうか」

「……………」

「すごい餓鬼臭いけど、なんかすっげえ嫌んなって腹が立って。だからソイツとさっさと別れて別の奴と付き合った。でも、結果は同じだった。それなのにお前は特に態度変えないし、それで、もつとココが」

見えないけれど、彼が心臓の辺りを叩いたんだろうと体に伝わる振動で悟る。

「疼いて、痛くて。そんな風な事思っのがなんか悔しくて、んな良く分かんねー自分がもつと腹立たしかった」

小さく、懺悔の様に話す彼の腕に、少し力が入った。水面に小さく映る影は重なっていて、それさえも境界線は曖昧。普段なら鼓動が早まるのに、何だかとても穏やかな気分で、されるがままになっていた。互いの呼吸さえ曖昧に聞こえて、その事に更に安堵する。

「『それ』が何なのかは、中学に入ってからやっと気付いた。流石に多少は成長したから、な。俺はお前に、妬いて欲しかった。焦がれて欲しかった。泣いて欲しかった。んで気付いたら、お前を振り向かせる為に、俺は色んな女と一緒に居た」

「……やる事変に大人なくせに、中身がガキンチョすぎ、でしょ」

「云うなよ。解ってたんだから。……幻滅、したか」

「元から、してるよ。色んな女の子、泣かせすぎ」

「……なあ、今、お前が泣いてるのは、なんでなんだ？」

彼の腕に、更に力が入った。苦しくなったから、顔を上げた。今度は彼が私の首筋に顔を埋めていた。首筋って云ってもマフ

ラー越しだから、少し重たいと感じる程度だけど。

でも、彼は確かにそこにいて、私は確かに此処にいる。それだけは曖昧なんかじゃなくて、しっかりと、私達は世界の一部になっていた。

いや、きつと違う。きつと今此処に在る全部が、私達の世界なんだ。

だからこんなにも曖昧で、こんなにも儚くて、こんなにも惹かれる。

「……汚い自分に嫌気が差した」

「なんだそれ」

「で、どーして、私な訳。それこそ、あんたなら選り取り見取りだったじゃない」

「さあ。……なんでだろうな。だけどいつの間にか、お前になつてた」

「……なんで、マトモに告白してこなかったの」

「云つたろが。悔しかったんだよ。単純に」

「……じゃあ、なんで、今、更」

「家に帰つたらおばさんとお袋に説教されるし……。それに、お前が泣きそうな顔してるって、電話で云われた」

「……………」

そつか、あの時あつちゃんが居たつて此処に来て直ぐ云つてたつけ。とぼんやり思い出す。

それにしても、私の周りの女性はバイタリティ溢れすぎていると思う。特にお母さんとおばさん。絶対ご近所ネットワークフル活用だよあの人達……。と変な方向に思考がずれていく私の頭に、また、彼の声が響く。

ゆつくりと、波間に差し込む月明かりみたいに静かに、海に沈む私に紡がれる言葉に、耳が、心が、意識の全てが、攫われていく。

「それで、いてもたってもいられなくなって、電車で2時間。だから俺は、お前が泣いてる理由を知りたいし、知る権利って奴がある」

「云った、よ」

「俺には良く分かんねーよ」

波の音と、お互いの呼吸だけ。世界から乖離された様な、不思議な感覚。

私と彼だけの曖昧な世界。遠くから車の音も聞こえて、その境界線さえ曖昧で、在るのかどうかも解らない。

日付が変わった事も、彼との関係も、未来も、よく分からない。ああなんて、曖昧。

「教えてなんか、やるもんか」

そう呟いた後の記憶が、やっぱりすごく曖昧になっていた。

始発の時間に間に合う様に駅まで行って、私達は2人で、みんなの世界に帰って行った。

曖昧な6日目（後書き）

名前を入れずにやるのは本気で無謀だったなあと反省しています。

曖昧な6日目 2

誰かの声が聞こえた。遠くでゆらゆらと揺れる声。

その声は私の頭上を通りすぎていつて、現時と夢の曖昧な境界線に消えた。

ふわふわと、微睡んでいるのが何となく解った。眠たくないと思っていたけど、やっぱり寝てしまったらしい。薬のせいなのか、疲れているせいなのか。

でも、正直起き上がる気なんか、欠片もなかった。何故なら微睡んでいるのが大好きだからだ（私がこの世で一番好きな瞬間は、あつたかい布団の中でぬくぬく微睡んでいる時なのだ）。

そんな曖昧な世界の中で曖昧さを噛み締めながら、ふと、気が付いた。

昨日あいつに好きって云われて、私否定的な事しか、云ってないんじゃないか、な？

あ、ヤバイ。

一気に覚醒した。がばつと跳ね起きてから頭を抱えた。

そうだよ、うわどうしよう。え、ナニコレ、私もしかして振ったことになっちゃってたりしちゃったりして？！え、この場合どうすれば？ と1人であわあわしていると、小さく吹き出す音が聞こえた。

「……………くっ。お前、何1人百面相してんだよ……………！ あーおもしろ」

「え、や、ちよつと待って！　なんで居るの！　わ、私思いつきりパジャマ……！！」

「あ？　おばさんが入って待ってけて。　俺って信用在るから？

」

「な、なんつー腹の立つ……！！」

なんでこのタイミングでこんな事になるんだろうか。　ベットの傍までイスを持ってきていたらしい変態は、私の真横で足を組んで座っていた。

頭は寝癖だらけだし、顔も思いつきり寝起きだし、パジャマだし、寝起きだからちよつとはだけてるし。

ちよつとお母さん何してくれてるの貴方！　とキレたくなってきた。　私はブツブツと恨み言を呟きながら、掛け布団を頭まですっぽり被って体育座りをした。　そしてまだ笑い続ける変態に背を向ける。　これを引き籠もりスタイルと名付けようと思う。　そしてまだまだ私の背後で笑っている変態に、我慢出来ずに思いつきり叫んだ。

「あーもう、早く出て行ってよ！　こっちは病人なの。　女の子なの！」

「今日出たプリントを持ってきてやってるっつーのに、なんつー暴言」

「私のが暴言ならそっちがやってるのは暴挙って云うんだよ！　ばっかじゃないの、早くでてってば……！！」

「嫌だ。　俺はまだ昨日の答えを聞いてない」

ベッドのスプリングが悲鳴を上げた。　私の背中には、確かな重み。

一瞬で塗り変わる、曖昧な世界。

でも、この曖昧さが壊れてきてることぐらい、きちんと気付いて

る。

私が必死で守って手放さなかった世界にヒビを入れたのは、彼。

「云えよ」

「……………」

「気になって勉強どころじゃない。今日だって何食ったかすら覚えてない」

「……………」

「云えよ。じゃないと、今すぐ……食うぞ」

「え？お弁当を？」

ワントーン下がった声音にそんなにお腹が空いていたのかと申し訳ない気分になる。私が昨日曖昧に終わらせたせいでおばさんのお弁当が食べられなかったなんて申し訳なさすぎる。

私がそう云ったにも関わらず彼はピクリとも動いていないように感じられる。可笑しいな。お腹空いてたんじゃないのかな。

後ろを向いて確認しようとした私の頭にベシリと何処となく力なさ気到手刀が下ろされた。

「いったい！なんでそこで叩くワケ！別にお弁当食べたって良いし！育ち盛りじゃん？」

「お、まえ、本っ当に、ばっか……！」

私にずるずるともたれかかって、思いっきり溜息を吐いた奴は「云えよ」　ともう一度、何故か力無く繰り返してきた。

曖昧な世界。ヒビを入れたのは彼だけど、きつと、壊すのは、これを創った彼じゃない。

彼の創ったこの世界を、頑なに、怯えながら、手放さなかった、

「…………レイカさんに、嫉妬した」

私にしか、きつと、壊せないと思った。

曖昧な6日目 2（後書き）

やっと終わりが見えてきました？（何故疑問系）

曖昧な6日目 3（前書き）

次の次でラスト、です。取り敢えず頑張って完結させてみま、す。

曖昧な6日目 3

ヒビの入った曖昧な世界。それを壊すのは、きっと私。

「嫉妬、した。 ううん。 違う、あの時私はレイカさんを見下した。 見下して、哀れんで、それでその上、嫉妬した。 ……自分が、汚いって、思った。 浅ましくて、薄汚くって、最低だと思った。 だから逃げて、でもって、なんか泣きたくなった」

「……………」

パタパタ。と音がしてお気に入りの優しいオレンジ色をしたシーツの上に昨日の海の一部が出現した。 私のそれほど長くない睫毛の先から流れ落ちていくそれは、一粒二粒で止んでしまった。 きっと昨日私の海は無くなってしまったのだ。 きっと後ろにいる彼が全部飲みこんでしまったせいだ。

私は染みの付いた乱れているリネンを見ながら、両膝の間に頭を沈め、自分の中にある何かを吐き出した。 彼がずっと無言だった事が、少し怖かったけれど、その事に何処か安心して曲がっていた背中を少し戻してほんのちよつと後ろに体重をかけてみた。

感じるのには確かな感触。

ああ、彼は今後ろにいて、私の話を聞いてくれてるんだ。 と、その事に何故だか胸がキュンとした。

「私、自分がどうしたかったのか良く解らない。 この曖昧な感じをずっと守りたかったのか、それとも壊したかったのか。 変りたいのか、変わりたくないのか。 もう分かんない」

「……お前は、結局どうなんだよ。 俺の事が好きなのか唯の幼馴染

みなのか。それをはつきりさせてみるよ」

問われて、私は何故だか少し躊躇する。これで本当に、きつこの曖昧な世界は壊れてしまうだろう。欠片さえ残さず、記憶の中に、その曖昧さの居心地の良さだけを遺して。

曖昧な、私達の世界。この世界の中では、2人だけの時は、彼は私のモノだと思えたんだ。

きつと今から始まる世界は曖昧なんかじゃなくなってしつかりと支えられていて　きつともっと幸せで、本当に彼を自分のモノだつて、胸を張って云えるようになるはず。

だからこの世界は、私が壊す。今から云う、たった一言で。

「……………わ、たし、は……………うん……………」

さようなら、曖昧な私達の世界。

「好きだよ」

ぎゅっと、抱きしめられる。強くて、痛いと思った。でも離して欲しいとも、思わなかった。

彼との曖昧な全て。

机の上の大量のチョコレートも、オレンジジュースも、ハンバーガー・セットも、似合わないコンビニの制服も、手袋も、アイスティーも、チーズバーガーも、テリヤキバーガーも、レモンティーも、マフラーも、海も、全部全部、愛おしくて。

でもきつと、曖昧じゃなくても、これからの物全てが、これまでの物も、全てが、愛おしい。そう思う。彼となら、そう思える。

さようなら、曖昧な日々。

曖昧な7日目（前書き）

終了。です。最後まで、名前を出さずに書ききりました。二度とこんな暴挙はしません。

曖昧な7日目

結局、曖昧な日々と恋人の日々は、あんまり変わっていない気がする。

「付き合って速攻で、デートしてるもんなの？」

「さあ？ 別に何時したって良いだろ。 朝帰りした仲だし？」

「親父臭く云うな変態」

あの後コイツが何か云おうとした時、ちょうど良いタイミングでドアをコンコンとノックされた。

私は思わず叫んで背後にいたコイツをベッドから叩き落としてしまった。

真っ赤になった私を見てにまにましたお母さんに、何があったのかと聞かれて、私は思わず部屋から逃げてしまい、少ししてからもう一度恐る恐る部屋に戻ると、ぐったりしたあいつと、更ににまにましたお母さんに出くわして、私もぐったりさせられた。

夕飯を置いて「ごゆっくり」とわざとらしく云ったお母さんが出て行った後に、日曜日にデートに行こうと云う話をした後、アイツはさっさと帰っていった。 家でおばさんからまた根掘り葉掘り聞かれるんだらうなと思うと、同情を禁じ得なかった。

絶対に、お母さんは出て行った後おばさんの所に行って「うちの娘をお願いします」トークをしたに違いない。 アーメンと胸で十字を切った後、あっちゃんに電話をして昨日心配してくれてありがとうと云った。 ら、

「まあ、そんなことよろしいですよ。 私達は友人。 その上貴女は私の親友に部類する方ですもの！ さながら私は貴方達2人に

恋の矢を射るギリシア神話のエロス様だったと云う事ですわね！

感謝の辞を示されるよりも、私は事の顛末を知りたいのです！ ああ神様つ。 此処にまします私の愛すべき親友の未来に愛おから

ん事を！！」

「え、と、あつちゃん？ 聞いてる？ おーい」

「はっ！ すっかり我らが愛の神に心を奪われておりました。 さ

あさ！ 遠慮する事など御座いません。 ずずいと話してごらんなさい！」

あまりのテンションの高さに更にぐったりしつつも、土曜日は一日療養して、そして日曜日。

私達は、特に何をするでもなく、ショッピングモールを唯ぶらぶらと歩いていた。 特に何か欲しい物がある訳でも、何処かへ行きたい訳でもない。 だから取り敢えず、出来たばかりのショッピングモールに行ってみようと云う話になったのだった。

私はちらりと自分の右手に視線を落とす。

其処には私のと、私の物じゃないゴツゴツした大きな手が繋がっていて、少し、鼓動が跳ねた。

周りには手を繋いでいるから、少しはカップルばっく見えるだろうと思うが、どうだろうか。

なんせ私と彼は確実に釣り合っていないのだ。 先日の喫茶店でそれを切実に感じた。 相手が悪かったのもあったかもしれないけれども、それにしても周りの反応には多少なりとも傷ついた。

だから思うのだ。 カップルっぽく見えるようにするにはどうしたら良いのだろうか、と。 勿論私が釣り合うようにファッションやら化粧やらは努力するようにしなければならぬ（今日はちゃんとビューラーも使えた）のは分かっている。 が、今すぐは無理だ。

即効性がなければいけない。

手を繋ぐ。

確かに一番手軽だし今すぐできて有効的だ。　ただと別にそれだけで彼氏と彼女に見える訳ではない、気がする。

うーん、どうしたら周りにいるカップルの様に、カップルっぽく見えるんだろうか。　……難しいもんだなあ。

首を傾げてふむむと唸ると、斜め上の方から呆れた様な溜息が降ってきた。

「……お前、本当に変な所で器用だよな。　良く歩きながら首を傾げられる……。　で、どうしたんだよ」

「いや……。　私達って、恋人っぽく見えるかなあ？　と思って」

「はあ？　なんだそれ」

「恋人っぽい恋人って、どんなだろう。　と思って。　うーん、どんなだと思う？」

「ああ、それはあれだな」

何かを納得した様に肯いている彼は、此方を向いてニヤリと笑った。

何故だか私はその時、狼に補食される羊の心境をとてよく理解出来た。

ぐいぐいと引っ張られたのは、階段前のちょっとした死角。

でも彼は今さっきから女性客の視線を集めているから、今更隠れる必要なんてない。　と云うよりも全く意味がない。

意味の分からない行動に眉根を寄せると、顎をぐっと捕まれて上を向かされた。

それからすぐ唇に、生暖かい感触。

「キスしてたら、どこからどう見ても恋人だろ？」

結論、曖昧な日々と恋人の日々は、違っらしい、です。

曖昧な7日目（後書き）

ハッピーエンドでフィナーレ！

最初の4話目ぐらいまでは書いたのが約半年前で主人公の性格が何処かに飛んでしまっていたので、最終的になんとも云えない別人感到に満ちていてすいません

誤字脱字など作者の国語力の低さが半端ないのでお教えいただければ…！と思います。ほんと願います。

改稿作業（2010/7/3）中にあまりにもコメントください恨みますよ的な自分の後書き前書きになに書いてんだ

と恥ずかしすぎて死にそうでした。本当にすみません。

いやはや、おまえはどれだけ寂しがってんだと。気持ち悪い事いっぱい書いててめげまくりですみません。

そして感想を下さった皆様、ほんとうにありがとうございます！正直感動で泣きそうでした。今も若干潤みます

最後になりましたが此処までお付き合いして下り読破してくださいました皆様、本当に有難う御座いました。

<了>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4339f/>

彼と彼女の曖昧ミーマイン

2010年10月23日14時32分発行